

猫かぶり御曹司とニセモノ令嬢 1

S h i o r i & H i r o y a

佐々千尋

Chibiro Sasa

termity



エタニティ文庫

目次

猫かぶり御曹司と二セモノ令嬢
1

5

流れ星に言い訳を

299

猫かぶり御曹司とニセモノ令嬢
1

あ……ありえない……

今まで泊まったことはおろか、入ったことさえない高級ホテルの一室で、姿見を前にした私は顔を引きつらせた。

頭からつま先まで映る大きな鏡の中には、パステルピンクのふわふわなワンピースを着た女がいる。最近あまり見かけない、まっすぐで真っ黒な髪は左肩の上でゆるく結ばれ、胸元に垂らされていた。

服のデザインといい、髪型といい、まさにレトロ。昭和の清楚なお嬢様そのもの。

全然趣味じゃない服を見下ろした私は、言われるままに従ったことを物凄く後悔した。震える指で胸の上の髪を一房つまみ上げ、強めに引っ張ってみる。耳の裏のあたりがピリッと痛んだ。カツラとかエクステとかじゃない、確かに私の地毛。

毎月行きつけのサロンで大枚はたいて手入れしていた、自慢の栗色ウェーブヘアはどこにいつてしまったんだろう……

今朝までとは全く違う色と手触りに呆然としていた。

突然、ノックもなしに部屋ドアが開けられる。驚いて振り向けば、事の元凶である伯父さんが満面の笑みで立っていた。

「おおつ、汐里ちゃん。綺麗になって。見違えたなあ！」

「どこがっ！ ダサくなったの間違いでしょ!？」

的はずれな褒め言葉に噛みつくくと、伯父さんはビクツと震えて仰け反った。

「い、いやあ。僕からすると、とてもいいと思うんだが……」

「イマドキこんな格好してるコなんていないし。伯父さんの時代とは違うのよ？」

「うーん、でも、一応お見合いだからねえ。先方が着物じゃない方が良いと言うし、華やかに、でも派手すぎず初々しくて可愛く凛とした感じ、と美容室に頼んだんだよ」

なんだそりゃ……

適当なんだか細かいんだかわからない伯父さんの注文に、内心でつつこんだ。美容師さんもさぞ困ったことだろう。

もう一度、鏡に映った自分を見つめてから、視線を時計へ向けると、もう十時半を過ぎていた。約束の時間が迫っている。私にしたらこんな格好で人前に行くなんて信じられないけれど、元に戻しているヒマはない。

それに、どんなイメージを持たれようと所詮は他人事だ。今の私は別人として、ここ

にいるのだから。

元とはいえば会社経営をしている伯父さんと、付き合いのあるどこぞの社長さんの口約束から始まったことらしい。

今年、大学を卒業する伯父さんの娘、つまり私の従妹と、二十八歳にもなつて彼女もいないらしい先方の次男を引き合わせてはどうか、という、よくある話。

これがお互いフリーなら問題なかったのだからうけど、従妹には既に彼氏がいた。お嬢様育ちで自分を曲げない性格の従妹は猛反発し、せめて顔を出すだけでもという父親を振りきって家出同然の旅行に出ってしまった。

娘に逃げられた伯父さんは焦った。このままでは先方に恥をかかせてしまふ、ひいては今後の取り引きにも影響が出る、と。で、白羽の矢が立ったのが私というわけ。

遺伝子の不思議というか、何というか、私と従妹は本当によく似ている。私の方が四歳年上だから、並ぶと少し、その……年齢を感じるけど、パツと見て間違われるのはしょっちゅう、というくらいそっくりだった。

どうせ相手方には一度しか会わないのだし、最終的に断るのなら誰が行つたつて同じこと。

伯父さんに土下座で頼まれた私は、そう自分に言い聞かせて罪悪感をごまかし、協力することにした……もちろん、しっかりと見返りも要求して。

あまり堅苦しくないように、というのが先方からの希望らしく、軽装で仲人を立てず、当人と父親同士の四人で会食をするスタイルに落ち着いた。

大げさじゃない方が身代わりの私としても楽だし、伯父さんも断りやすいだろうから、この申し出は素直にありがたかった。

といっても、やはり他人になりきるのは緊張する。そもそも従妹と違って、普通の会社員の家で生まれ育つた一般人な私に、お嬢様の代わりがとまるのか不安だった。

緊張でガチガチの私は、うつむいたまま伯父さんの後について会場へ向かった。お相手はもう中で待っているらしい。

ドアが開くなり親しげに挨拶を始めた伯父さんの後ろで、紹介されるのを待つ。仕事と同じで、若輩者は変にでしゃばらない方がいいだろうと判断したのだ。

ひとしきり社交辞令を述べた伯父さんが、ようやく私を示すように手を向けた。「これがウチの娘です」

「初めまして。羽深菜摘と申します」

大きすぎず、小さすぎず、はつきりと。会釈は顔が隠れない程度に。口角は心持ち、上げて。

会社で来客に應對する時のように、細心の注意を払って頭を下げた。

「おやおや。お若いのに、よくできたお嬢さんだ。相手がうちの息子なのが申し訳ないくらいですよ。ほら、お前も挨拶しなさい」

先方の社長さんに促され、後ろに立っていた男性がぺこりと会釈した。

「初めまして。守崎啓也です」

顔を上げた見合い相手はメガネの奥の瞳を細め、実に可愛らしく、へにやつと笑った。うっわー……

こんなこと言っちゃいけないだろうけど、否定的な意味で驚いた。

男性にしては少し低めの身長に、可愛らしい顔立ち。ちょっと癖のある長めの髪。全体的に色素が薄いのか色白で、髪も明るい茶色だった。

まあ、私は全然好みじゃないけど、可愛い系の男の子とかが好きな人には受けると思う。実年齢より、かなり若く見えるし。

ただ、問題は服装。まずスーツのサイズが全然合っていない。借りてきた服のようにぶかぶかだった。背が低くて細身だから仕方ないのかもしれないけど。お金持ちのくせにオーダーメイドじゃないのだろうか。

それにメガネがダサい。黒ぶちまではいけないものの、フレームが太くて真四角。お爺ちゃんがかけてた老眼鏡に似てるかも……なんて、妙な懐かしさを覚えるデザイン

だった。

ここに来るまでは逃げてしまった従妹に腹を立てていたけど、いざ相手を目の前にすると同情する気持ちしか浮かばなかった。形だけじゃなく本当に見合いしろと言われたら、私でもゴネるに違いない。

私が見ても意味がないからと、あえて釣書や写真を確認しなかったことを少しだけ後悔した。どんな写真だったのかは知らないけど、一度見ておいたら、ここまで驚くことはなかっただろう。

お互いの挨拶が終わったところで、計ったように料理が運ばれてきた。

私は内心引いているのを悟られないように笑みを浮かべ、促されるまま着席した。

できるだけ穏やかに。バレないように余計なことは言わず、困った時は笑顔でごまかしつつ伯父さんを頼る……

あらかじめ決めておいた約束を心の中で繰り返しながら、目の合った守崎さんに向かってもう一度にっこりと笑いかけた。

お見合いの代理は、うそ臭い笑顔で「はい」と「いいえ」を繰り返しているうちに終わった。

込み入った話は全て伯父さんが対応してくれたし、私としては表情筋が疲れたくらい

で特に難しいこともなかった。勝手に髪型を変えられたのは気に喰わないけど、こんなに楽なことで謝礼をもらっていいのかな。

結局、向こうも乗り気じゃなかったんだろう。当人の格好からも、やる気のなさが見えていた。

とにかく大仕事を終えた私は、伯父さんからこれ以上ないほど感謝され、ちよつと贅沢な買い物ができるくらいのお金を手にしてご満悦だった……今朝までは。

朝イチで伯父さんからの電話を受けた私は、一瞬、何を言われているのかわからずに、もう一度聞き返した。

「……どういうこと?」

「うん。だから、守崎さんがこの間の話をすすめてほしいと言ってきてね」

「はあ!」

正式なお見合いの段取りなんて知らない私でも「話をすすめる」の意味くらいわかる。ありえない展開に声を上げると、一応、悪いと思っっているらしい伯父さんは、あわてて言葉をつけ加えた。

「い、いや。うちからはなかったことにしてくれって言っただよ? でも、もう一度会って考えてほしいって」

「考えるも何も、私の話じゃないでしょ。菜摘ちゃんはどうかしたの?」

「それがまだ戻らなくて……」

困り果てたような弱々しい声に、正直イラッとした。反抗する娘にも、ごり押ししてくる見合い相手にも強く言えないとは情けない。

それに、いくら取引先でも、そこまで気を遣う必要があるのだろうか。

もっと言えば、伯父さんが経営している会社といっても、私やお父さんが雇われているわけじゃない。万が一、先方と揉めて伯父さんの会社がかたむいたって、正直うちには関係ない。

そこまでしてあげることないじゃない、と心の声が響く。だけど、それと同時に子供の頃から可愛がってくれた伯父さんの顔と、先日受け取った多めの謝礼が頭をよぎった。「もう一度、会うだけでいいの?」

「汐里ちゃん、会ってくれるのかいっ」

驚きと喜びの混じった伯父さんの声をさえぎり、思いつきり吼える。

「言っておくけど、次回しようなことがあっても、絶対に助けてあげないんだからねっ!」
 どんなにお金を積まれても、こんなことは二度とご免だ。

従妹が会っていたとしても断るわけだし、バレなければ誰も傷つかない。実際にやってみるまでは私もそう考えていた。けれど人を騙すことは思ったよりも心苦しかった。

予定が決まり次第また連絡するという伯父さんの言葉にあいづちを打った私は、通話を終えて子機をスタンドに立てる。
思わずついた溜息は、やけに大きく感じた。

2

どんな事情があっても気の進まないお願いを聞いてはいけないのだと、今日ほど感じたことはない。

無駄に広い伯父さんの家の前で腕組みした私は、手元の時計を睨みつけた。

約束の時間まで、あと十分。よほどルーズな人じゃなければ、少し早めに来るはず。

今日の予定を思い返した私は、朝から何度ついたかわからない溜息と共に肩を落とした。私個人を気に入った、というより、伯父さんの会社との繋がりを強固なものにしたいのだろう。見合い話をすすめたらしい守崎さんは、あろうことか二人だけで会いたいと言いつ出した。

もちろん私は無理だと答えた。でも間に入っている伯父さんが断りきれず、結局なし崩しにデートっぽいことをさせられるはめになってしまった。

待っている間、ヒマを持てあました私は自分の姿を見下ろした。

先日のお見合いとは違う、クラシカルなデザインの紺のチュニツクワンピ。やぼったい二昔前の令嬢スタイルに懲りた私が独断で決めた。もちろん、お金を出したのは伯父さんだけ。

これなら流行にも合っているし、ちょっとかしこまった席から、カジュアルなお出かけまで着まわしがきく。今回だけじゃなく後々まで使うことを考えた良いチョイスだと、自分を褒めたかった。

難があるとしたら、若い菜摘ちゃんにしては落ち着きすぎているってことだけど、どうせ破談になるのだから、むしろ幻滅してくれた方がいい。

ほどなく一台のセダンが目の前でゆっくりと停車する。メタリックブルーの綺麗な車だったけど至って普通の、その辺でよく見る国産車だったのに拍子抜けした。

偏見なのかもしれないけど、お金持ちっていうのは、外車に乗っているものだと思う。実際、伯父さんもY字を反対にしたマークの車やら、進化したマラーイオンみたいなエンブレムのついた車を所有している。

別に急がなくてもいいのに、オタオタしながら車を降りた守崎さんは、相変わらず気の抜けた笑顔を見せた。

「あ、お、おはようございます」

「……おはようございます」

思わずつられて苦笑い。

はつきり言って全然魅力的じゃないんだけど、合わせてあげないと可哀相になる。他人の同情を誘いやすいというか、妙な雰囲気を持つ人だ。

「えと、どうぞ乗ってください。あ、そうか。僕が開けますね」

あわてて近づいてきた守崎さんが、助手席のドアを開けてくれた。

見るからにモテなさそうだし、こういうことに慣れていないんだらうけど、少し落ち着いてほしい。

呆れた私は、気持ちさが表情に出ないよう気をつけながら、お礼を言うために顔を上げた。

……あれ？

ふと感じる違和感。低いと思っていた彼の目線が、想像より高い位置にあった。私とそう変わらなく見えていた身長は、確実に十センチ以上違う。

じっと見つめる私に気づいた守崎さんが、不思議そうに首をかしげた。

「どうかしましたか？」

「あ……背が高いなー、とあって」

つい本音を漏らしてしまった。

守崎さんは肩をすくめて微笑む。どうやら素のままの口調で答えたことには気づかれ

なかつたらしい。

「そんなに高くないです。猫背だから実際より凄く低く見えるみたいで、隣に立つと驚かれますけど」

「そうなんですか」

確かに思ったより高くて驚いたけど、よくよく見れば成人男性の平均ぐらいで、飛び抜けて高身長というわけじゃない。それでも低くはないんだから、猫背を治せばいいの。余計なお世話だろうけど、こんな実りのないお見合いにすぎるより、自分磨きをして彼女を探した方が良い気がした。

一度私に断られたことは忘れてしまったのか、やけに楽しそうな守崎さんを冷ややかに見つめる。

なんだか長い一日になりそうだった。

車は市街地を抜け、郊外へと向かった。一時間後には、木々に囲まれた山道に差ししかつていた。

ちょっとした展望台と別荘地があるだけの山だから、小学校の遠足以来、訪れたことがない。懐かしくなった私は、隣に守崎さんがいるのも忘れてあたりをきよろきよろと見まわした。

「何か珍しい物でもありましたか？」

子供っぽいと思ったのか、守崎さんがクスツと笑う。

気づかないうちにはしゃいでいた私は、恥ずかしくなって身を縮めた。

「すみません。しばらく来ていなかったたので懐かしくって」

「あれ。菜摘さん、大学の天文サークルに入っておられるんですね。ここには観測に来ないんですか？」

うっそお!?

守崎さんのさりげないつつこみに、ぎよつとした。

菜摘ちゃんが天文サークルに入っているなんて聞いたことがないし、お見合いの席でもそんな話が出なかった。大方、守崎さんに渡した釣書にでも書いてあったんだろう。

事前に確認しなかった私も悪いけど、伯父さんも教えてくれればいいのに。

「さ、最近は大忙しくって、その、あまり活動に参加していないっていうか……」

冷や汗を垂らしながら、しどろもどろに言い訳する。

「ああ、そうなんですか」

守崎さんは苦しまぎれの嘘をあつさりとした。私の様子がおかしいことには気づかなかつたらしい。

よ、良かった……

急激に疲れを感じた私は、ぐったりとシートに寄りかかった。

本当、心臓が悪い。心の底から、早く帰りたい。

ぐるりと山道をまわった私たちは、展望台で景色を楽しんだ後、近くのペンションでお昼ご飯を食べた。

近場にすぐ入れるレストランがないからと、あらかじめ予約してくれていたたり、気づかない感じのイタリアンを指定していたり、そのないプランの立て方に驚いた。

雑誌とかで紹介されているデートコースを参考にしたのか、誰かに教えてもらったのか。デート慣れしていなさそうな守崎さんが自分で考えたとは、とても思えなかった。

最後に案内されたのは、山腹さんぶくのひらけた場所にある守崎家の別荘だった。

斜面を利用して建てられたモダンな建物は、道路に面した玄関が最上階で、そこから下っていく三階建てになっていた。

柱が全く見当たらない開放感のあるリビング。全面開放できる大きな窓。私の部屋より広いバルコニー。建築関係の会社で働いている私は、この別荘にかかっているだろうお金をざっと試算して眩暈めまいに襲われた。

伯父さんもまあまあのお金持ちだけど、これはレベルが違う。この不況下で、たかが

別荘にこれだけの大金をかけられるなんて。

バラエティ番組とかでたまにやつてる豪邸訪問を思い浮かべた私は、セレブって本当にいるんだなあと、のんきに思った。

「ここからの景色も悪くはないんですけど、下のゲストルームの方が、眺望たうぼうは良いんですよ。ほら、ここだと木の枝が邪魔でしょう?」

窓際に近づいた守崎さんが外を指さす。脇から伸びた大木の枝が、斜めに景色をさえぎっていた。

確かに眼下のパノラマを楽しみたい人には邪魔だろう。だけど、茂ったみずみずしい葉が日の光を反射してキラキラ光っていて――

「これはこれで綺麗だと思いますけど」

お世辞でも何でもなく、素直な気持ちで感想を口にする、守崎さんは一瞬驚いたように目を睜ひらってからニツと笑った。

……なんだろう。今まで見せていた、ふにゃふにゃした微笑みとは違う顔。

意外な表情に驚きつつも、まずいことを言ったのだろうかと内心で焦る。

「きみは義姉あねと同じ感性を持っているんですね」

「おねえさん、ですか?」

「そう、兄嫁です。その木は彼女が切らないでほしいと言うので、残してあるんですよ」

別に自分の美的感覚が優れているとは思わないけど、同じように感じる人がいるのは何となく嬉しい。

どんな人なのか興味が湧いたものの、これは破談予定のお見合い。この先、そのお義姉あねさんに会うことはないだろう。そもそも私は代理だし。

それにしても綺麗。

もう一度バルコニーに目を向け、自然の作り出す様々な濃淡の緑をながめていると、近づいてきた守崎さんに手を取られた。

「え?」

きよとんとして、つかまれた手と守崎さんを見比べる。

例のダサメガネの奥ですっと目を細めた彼は、わずかに口角を上げた。

「せっかく来たんですから、ぜひ下からの景色も見ていってください」

「あ、あの……?」

答える前に、強く腕を引かれる。突然、足早に歩き出した守崎さんに引つ張られて、あわてて足を動かした。

なんなの、急に。

わけがわからず見上げた彼の顔は、朝に見た時よりも高い位置にある。常に少し曲がっていた背中が、今はまっすぐになっていた。

ゲストルームへ案内された私は、いきなり態度の変った守崎さんに驚いていたことも忘れ、部屋の造りに見入った。

廊下から見る限り三部屋に区切られているようだ。上階ほど広々とはしていないけれど、南側に面した明るいリビングにはやっぱり大きな窓がついていた。

寝室は可動式の壁で区切られており、全て開けてしまえばリビングとワンルームにもできるらしい。ちよつとしたカウンターキッチンに、奥はバスルームだろうか。

まるで海外のコンドミニアムのように。もちろん内装や家具はスイート並み。

守崎さんご自慢の景色もそちのので、室内を見ていると、後ろから笑われた。

「やはり職業柄、建物の方が気になりますか？ 確か住建会社にお勤めでしたよね」

「ええ。建築デザインの担当じゃなくて、ただの営業事務なんですけど、関わっているとうしても……って、えっ？」

ハツとして振り返る。

ドアに寄りかかって腕組みをしている守崎さんは、ニヤニヤと笑っていた。

「これって改めて挨拶するべきかな……ねえ、羽深汐里さん？」

彼の口から出るはずのない自分の本名を耳にした私は、すうっと血の気が引くを感じた。

バレた……というか、バレてたんだ。

貧血を起こした時のように、目の前がゆらぐ。冷えていく指先とは裏腹に、心臓が激しく鼓動を打っていた。

自分は汐里ではなく菜摘だと、しらばつくれるべきなのかもしれない。でも守崎さんは確信を持って私の名を呼んだ。それはつまり素性を調べられたということ。しらを切りとおすのは無理だろう。

伯父さんには悪いけど、早々に諦めた私は、開き直って顔を上げた。

「いつから気づいていたんですか？」

「あれ、簡単に認めるんだね」

少しバカにしたような言い方に、奥歯を噛み締める。

目の前の守崎さんには、今朝までのおどおどした態度が全く見られなかった。まさか今の態度の方が演技なんてことはないだろうから、わざと本性を隠していたに違いない。「ごまかしきれるとは思えませんが。どうせ色々調べたんでしょう」

目をそらさずに言うと、守崎さんは意外そうに眉を上げた。

「へえ」

「なんですか」

「いや、何でもない。そうだな、きみが別人だっていうのは初めに会った時からわかってたよ。よく似てると思うし、親父は気づいてないみたいだけどね。俺、人の顔を覚えるの、得意なんだ」

どうでもいいことのように言われた言葉に衝撃を受ける。

葉摘ちゃんのふりをし続けた努力と苦労と我慢は、全くの無意味だったらしい。

静かに息を吐く。身体をまっすぐに彼へ向け、頭を下げた。

「……騙だましていたのはお詫びします。本当に申し訳ありません」

私の謝罪をどう取ったのか、守崎さんはかすかに鼻を鳴らした。

「言い訳しないの？」

「え？」

質問の意味がわからずに、顔を上げる。

彼ははっきりと軽蔑けいべつの表情を浮かべ、わざとらしく肩をすくめた。

「女はすぐ言い訳して他人のせいにするからね。自分のせいじゃない、まわりが悪いんだって」

私だけじゃなく、女性全てをさげすむような言い方に引っかけりを覚えるけれど、受

け流して首を横に振る。

確かに身代わりになったのには事情がある。でも最終的に決めたのは私。他の誰のせいでもない。

とがめられるだろうと身を固くし、うつむいて彼の言葉を待つ私の耳に届いたのは、ひそかな笑い声だった。

驚いて見れば、守崎さんは怒るところか楽しそうに笑っている。

「きみ、変わってるね」

全然読めない反応に、変わっているのは彼の方だと思った。

大体、こんな中途半端なタイミングで、ニセモノだと気づいていることを明かす理由がわからない。

もし伯父さんの会社との繋がりが欲しいのなら、実の娘じゃない私が相手では意味がない。すぐに指摘して本人を連れてこいと詰め寄るか、逆に気づかないふりを続けて、後戻りできないところまで話をすすめるはず。

なんで、今なんだろう……

「あの……最初から気づいていたのなら、なぜすぐに言わなかったんですか。それに、こちらからお断りした時にどうして考え直してほしいなんて」

疑問だらけの私に、守崎さんは屈託くつたくのない笑みを浮かべた。

「その方が、面白そうだったから」

「はい？」

面白いつて、何が？

多分、私の顔には「わけがわかりません」と大きく書いてあるんだろう。守崎さんはおかしそうに肩をゆらしながらメガネを外し、前髪を掻き上げて後ろに流した。

これまで見せていた気弱そうな表情からは想像がつかないほど、自信にあふれた顔。童顔なことには変わりないけど、小悪魔系の、いわゆるイケメンがそこにいた。

ウソでしょ……

あまりの変貌ぶりに、ただぼかんと彼を見つめる。

呆然としていたのを見惚みとれていると勘違いしたのか、守崎さんは嫌味っぽく口の端を上げた。

「ダサくて地味で、ひ弱そうな奴が、こんなに格好良いとは思ってなかった？」

「はあっ!？」

考えるよりも先に声が飛び出す。ぼうっとしていたせいで聞き流してしまったけど、気持ち悪いことを言われたのはわかった。

「あれ、違うの。俺イケてない？」

「イケてるんでしょうけど、私の好みじゃありませんから。ぜんっぜん!」

突然の自信満々な態度に、苛立ちが膨らんだ。

世の中の女全てが、顔が良い男に弱いなんて思わないでほしい。この数十分関わっただけでもわかる。この人、見た目は良いけど性格がおかしい。というか最悪だ。

威嚇いごするように睨みつけていると、彼はこれみよがしに肩をすくめた。

「それは残念」

口ではそう言いながら、どうでもよさそうな素振りで歩き出す。守崎さんはリビングの真ん中に立つ私の横を通り抜け、窓に近づいて外をながめた。

「ここだけの話、俺、女つて苦手なんだよね。でも、この見た目に実家が金持ち、しかも職業は会社役員だろ。ムダにモテちゃってさあ」

またいきなり始まった自慢に、白い目を向ける。

本人は真面目に悩んでいるのかもしれないけど、嫌味にしか聞こえない。

「ダサい格好すれば寄ってこないから楽なんだけど、今度は親父が心配して、しつこく見合いをセッティングするし」

「……はあ」

後ろからグーでぶん殴ってやりたい衝動を、ぐっと堪こえた。

「見合いに来るコつて更に面倒でさ。社長の息子と結婚するのが目的だから、俺本人がダメでも気にしないんだよ。おかげで毎度こつちから断らなきゃいけないし、断ると親

父がまた心配するしの悪循環」

「そりゃあ、性格がこんなに歪んでるのに、見た目まで悪くして見合い相手を選び好むするなんて、誰でも心配する。」

赤の他人だけど、守崎さんのお父さんに同情した。

「ところが今回は違った。相手が別人になっていただけでも驚いたのに、ひと目見た瞬間、きみ、思いつきり俺に幻滅しただろ？」

「うっ……」

「きくりと身を震わせる。自分では完璧なボーカーフェイスだと思っていたのに、しっかりとバレていたらしい。」

「面白かったね。刺激的っていうかさ。俺、今まで女相手にワクワクしたことないんだけど、きみとはもう一度会って話をしてみたかったんだ」

「そう、ですか」

「ここは喜ぶべきところなんだろうか。正直、嬉しくも、ありがたくもない私は、あまい言葉を返した。」

「くるりと踵かかとを返した守崎さんが戻ってくる。そのまま私の前まへで止まると、笑顔で首をかしげた。」

「ねえ、俺って、きみからすると魅力がない？」

「言っている意味がわからず、眉間にしわを寄せた。言葉は理解できても彼の意図が読めない。」

「何の話かわかりませんけど……魅力的には見えません」

おそろおそろ、でも偽りない本音を口にした。

守崎さんは怒るでもなく、あごを撫でている。

「ふうん。例えば俺の容姿とか、環境とか、きみにはどう見えてるの？」

「どうも何も、興味がありません。十人十色って言うでしょう。守崎さんが知らないだけで、世の中には色々な好みの人がいるんです。私は格好良い人や、お金持ちを素敵だと思わないだけです」

「暗に世間知らずだと指摘したのだけど、けなされたことに気づいていないのか、それともさげすまれて喜ぶ趣味でもあるのか、彼は満足げにニヤニヤしていた。」

「嬉しいね。きみのような価値観の人に会いたかったんだ」

私は嬉しくないですけど……

思わず口をつけて出そうになった言葉を呑み込む。

「彼が満足するまで、この無意味な会話を続けなければならぬのかと思うと、げんなりした。」

笑顔に合わせて細められた守崎さんの瞳に、不穏な光が走る。嬉しそうで楽しそうで、

でもどことなく、ほの暗いまなざし。

急に目に浮かぶ色が変わったことに不安になった私は、彼から視線を外した。

「頭の回転が速くて賢明けんめい。でも、きみ、ちよっとバカだね。それともこういうことは知らないの？」

「え」

何が？

そう尋ねる間もなく、腕をつかまれ引つ張られた。突然のことにバランスを崩した身体と、浮遊感。流れる景色。

驚きにぎゅっと目をつぶった私が次に目を開けた時、守崎さんはソファに転がった私を、上から押さえつけていた。

信じられない状況に目を見開いた。

ソファに押し倒されたことの意味がわからないほど子供ではないし、同じような状況を経験したこともある。ただこんなに唐突で、強引だったことはない。しかも、ついこの前会ったばかりの人間に。

呆然として見上げた先では、守崎さんが、今、自分がしていることを理解しているのか疑いたくなるほど、にっこり笑っていた。

「いくら見合い相手でも、家で二人きりになっちゃダメだと思っちなあ。俺がドアに鍵をかけたのも気づいてなかったでしょ」

「離して」

感情を込めずに言いきって、睨みつける。

片手で私の両手首をつかみ自由を奪った守崎さんは、子供に言い聞かせるように優しい声を出した。

「怖がらなくていいよ。乱暴なことほしくないから」

「怖がってるんじゃないよ、怒ってるの！」

何か勘違いしているらしい彼に向かって吼はえる。

身をよじり、足をばたつかせる。動かせるところを全て使って抵抗した。

「もうっ。どきなさいよ！」

守崎さんはゆるく苦笑いすると、実に簡単に私の動きを封じた。両手首を拘束したまま、右足の太腿の上に馬乗りになり、空いた片手で左足を押さえ込む。

足どころか腰まで動かせなくなった私にできるのは、肩と足先をもじもじゆらすだけ。こんな奴のいいように組み敷かれてるなんて、ムカムカしてしょうがない。

私を見下ろした守崎さんは、穏やかに微笑んだ。

「暴れないで。これ、お礼のつもりだから。じっとしてたら気持ちよくしてあげるよ」

「はあ!? 何言ってるのよ、このヘンタイ!」
 藪をつついて蛇を出すとか、火に油を注ぐとか色々な言葉が頭の中をよぎったけれど、もうそんなことは関係ない。思いつく限りの文句を並べ立てた。
 相変わらずニタニタ笑っているだけの守崎さんは、汚い言葉を吐きまくる私の唇に、ふうっと息を吹きかける。

「その口、キスしてふさいじゃおうかな……」

「やだっ!」

気持ち悪さで全身に鳥肌が立つ。キスなんて冗談じゃない。

「なんてね。大丈夫、しないよ。服も脱がさない。ちよっと触るだけ」

キスはしないとと言われて、ほっとしかけた私は、続いた言葉に目を剥いた。

「いやいやいやいや、全然、大丈夫じゃないしっ。こんなの痴漢と一緒じゃないの!」

「ああ、そういうのもいいね。痴漢ブレイっていうの?」

私の意図と全く違う方向に解釈した守崎さんは、「ちよっと燃えるね」なんて感慨深げにうなずいている。

「そういうことじゃな……あーっ!」

考えを改めさせようと口を開きかけたところで、着ていた服をベロンとめくられた。

「ちよっと何するの。脱がさないって言ったじゃない!」

そもそも脱がす脱がさないの問題じゃないのだけど、怒り心頭なせいで、まともな判断ができなかった。

「うん。でも、すそが長いから、ちよっと上げないと手を入れにくいんだ」

手を入れるって……直に触るつもり!?

ぎよっとして仰け反る。守崎さんはおのく私にかまわず、チュニツクワンピをお腹のあたりまでたくし上げた。

「こういう服いいなあ。薄いし軽いし、すそが広がるから色々しやすい」

そんな理由で重宝されたくない。自慢の一品がけなされた気がして、またムカついた。邪魔するものもなくなった脇腹を、するりと撫でられる。くすぐったいのか、それとも違う何かなのかわからない感覚に震えた。

「や、やだ。やめて」

無性にゾクゾクして、声のトーンが上がる。指先で優しく触られるせいで、余計にそこへ意識が集中してしまう。

「声、可愛いね。感度も良好」

するする上がってきた指が、ブラのきわを引っかけた。

指の方向ばかり気を取られていた私は、足の付け根に触れたものにハッとした。見れば、膝頭を押しつけられている。少し動かされるだけで、ショーツの奥の敏感な場所が

こすれて、痺れに似た甘い感覚が全身に広がった。

「あつ、やあ！」

ぎゅっと目をつぶり、首を振る。こんな風にされて感じるなんて、自分が信じられなかった。

「下の方が好き？」

樂しそうな守崎さんの声に答えられず、唇を噛む。こんな状況で反応してしまうのが悔しくてたまらない。

「も、やめ……っ」

「抵抗しないで、気持ちよくなっておけばいいのに」

つむがれる悪魔のささやきに、また首を振った。

下半身を刺激されるのに合わせて、ブラの下に潜り込んだ手が膨らみを揉みしだく。先端をつままれるたびに身体がはねた。

前の男と別れてから四年。それ以来恋人も作らず、遊ぶこともしなかったせいかわ、初めての時のように身体が過剰に反応した。

「はあ……あ、ああっ」

嫌なのに気持ちいい。荒い呼吸と一緒に声をこぼした。

そうやって、どのくらい過ぎたのか、守崎さんが私の手を解放して、身体を起こす。

熱い身体を持ってあまし、ぐったりした私は、自由になったというのに逃げることもできず、彼を見上げた。

息苦しくて、頭がぼうつとする。散々いじり倒されてしまった後では、もうどうにもなれという、ヤケツパチな気持ちしか起こらなかった。

守崎さんは、私の両膝を立たせて大きく開き、その間に正座をした。下着とストッキングをつけたままとはいえ、恥ずかしい格好に眩暈がする。

「あ、やだ、こんな……」

「膝でグリグリしただけじゃイケないだろうから、手伝ってあげるね」

「え」

驚いて起き上がるより早く、守崎さんの手がストッキングの上から秘部を撫でる。膝で押されていた時とは違う細かい動きに、内腿が震えた。

彼の指先がぐつと蕾を押し込む。強い刺激に息をのんだところで、ふいに指が離れた。

「うーん。ストッキング破いてもいい？」

「ええっ!？」

いきなり物騒なことを言われ、呆然とする。服を脱がさないという言葉に反してはいないけど、破く方がよっぽどひどい。

すぐに我に返った私は、思いきり首を振った。

「い、嫌っ！」

「じゃ、ちよつと腰上げて。コレ下げるから」

ストッキングの穿き口をつかんで引つ張られる。

「嫌よ！」

どうして無理矢理されている私が協力しなければいけないのか。

「あ、そう」

拒否をあつさり流した守崎さんは、また私の足の付け根に指を当て、さつきと同じように強く押し込んだ。

伸びきった布地に彼の爪が引っかかる音がする。

「ちよつと」

本気で破くつもり!?

焦って見つめると、守崎さんは不思議そうに首をかしげた。

「何？」

「嫌だつて言ったでしよっ」

「うん。だからわざと破いたりほしくないよ。それでも伝線しそうだけど。まあ最悪、穿けなくなっても帰る途中で買ってあげるから大丈夫」

守崎さんはちよつとも大丈夫じゃないことを言いながら、ニッコリ笑う。行為自体をや

める気は全くないらしい。

眉間に力を込めると、彼の笑みが深くなった。

「……それとも、腰上げてくれる？」

言いなりになるのを嫌だと思うのと同時に、物凄くバカバカしくなってくる。もう色々されちゃってるのに、何で今更ストッキングなんかで揉めてるんだらう。

下げたいなら、下げればいい。呆れ混じりの溜息をついて、少しだけ腰を浮かせた。

「ありがとう」

嬉しそうにお礼を言った守崎さんは、すかさずストッキングを下げショーツに触れる。

「結構濡れてる」

「や、言わないでよ」

膝で押された時よりも強い刺激をピンポイントで与えられ、息を呑んだ。

「さあて、どこらへんがイイところか、な？」

歌うように拍子をつけた言葉と共に、クロッチの脇から滑り込んだ指が中心に突き立てられる。

長い間、何も受け入れていなかったそこは、指一本でもビリビリ痺れた。

「あああっ！ 守崎さんっ」

入れられただけで強い快感を覚えた私は、何かにつかまりたくて、とっさに守崎さん

の腕へ手を伸ばす。

それを制止と受け取ったらしい守崎さんは、ニツと口の端を上げ意地悪い笑顔を作った。

「ダメって言われてもやめないよ。でも、ただイカせるだけじゃ面白くないから、俺のこと、名前で呼んだら続きをしてあげる。呼ばなかったら、このままだよ。イカせもしないし離しもしない」

「あ……そんな……」

守崎さんの指を呑み込んでいる場所が、どくどく脈打つ。もっとしてほしいと叫んでいるみたいだった。

何かに急かされるように息が上がる。浅く速く呼吸を繰り返していると、中に入っているのとは逆の手が、ショーツの上から敏感な蕾を押し潰した。

「ああ！」

「はい。言つて」

押されるだけでもどかしいのに、守崎さんはショーツにあてた指先を優しく動かす。それだけでは快感にならないけれど、中と外、両方を触られているせいで、抵抗する気持ちは削がれた。

「ひ、啓也さ……」

「んー、五十点。恥ずかしがらなくていいから、さん、は抜きでね」

溶けかけた理性が震えた。

別に恥ずかしくないし、敬称をつけてやるほど尊重してもいない。ただ気に喰わない奴の名前を親しげに呼びたくなかっただけ。

勘違いしないで、という意味を込めて睨むと、守崎さんはすつと目を細めた。

「まあ、言わなくてもいいよ。ここを五時に出るとしても、あと二時間半あるから、その間すつと楽しめるし」

あえて考えないようにしていたけど、今はつきりわかった。この人、DSで鬼畜だ……本気だと証明するつもりなのか、守崎さんが中の指を荒っぽく動かす。

響く水音と全身を貫く感覚に仰け反り、思わず声を上げた。

「あ、あつ！ ひろ、啓也っ」

「良くできました」

満足げなささやきが耳に届く前に、抜き挿しされる速度が上がった。合わせて蕾に添えられていた指が強く押し込まれ、こねるように円を描く。

残っていた理性が一気に吹き飛び、言葉にならない声を上げながら身体を震わせた。

信じられないくらい濡れているのが、自分でもわかる。出し入れされるたびに立つ音で、耳まで熱くなった。

奥に突き立てられた指が、ある一点をかすめた。ひととき強い感覚に襲われ、つかんでいた腕に爪を立てる。

「ふあっ！」

「みーつけた」

語尾に音符でもつきそうな感じでつぶやいた彼は、その場所を強くこすり、引つ掻く。ぎゅっとなつた目から生理的な涙がこぼれた。

「可愛い、汐里。そろそろイッておこうね」

ショーツの上からつままれた蕾が強くひねり上げられる。同時に中の一番感じる場所を攻められ、私は高みへと押し上げられた。

「う、あああっ！」

イッた時の真つ白な世界で、彼の指の熱だけを強く感じた。

ほんやりとした意識を占めるのは、女は苦手だと言いながらこんなことをする彼への怒りと、自分の浅はかさに対する嫌悪だった。

気を失うようにして眠ってしまった二時間後、目覚めた私は、それ以上されていないことに気づいて驚いた。てっきりあのまま美味しくただかかってしまっただろうと思っていたのに。

もちろん、直に指まで入れられてイカされたことに納得はいかないし、腹も立つ。不覚にも気持ちよかったけど、続きを期待してなんかいない。あれ以上のことをされなくて本当に良かったと断言できる。

……でも、彼は何のためにあんなことをしたんだろう。ただ触るだけで満足する人？ 不思議に思ったけれど直接尋ねることもできず、結局、わけがわからないまま、私たちは別れた。

完全に無事とは言えないながらも頼まれたデートを終え、彼と縁の切れた私は、その後いつもどおりの生活に戻った。

数週間が過ぎる頃には、あの別荘での記憶は少し薄れ、彼はそういう性癖なのだろうと笑えるようになっていた。

4

「ちよっと、どうしたのよ汐里。ぼーっとしちゃって」

「え……」

世の人が休日前で浮かれる金曜の夕方、自分のデスクに向かっていた私は、後ろから

かかった声に振り向いた。

みづもじり
見積書の確認をしていたはずなのに、いつの間にかぼんやりしていたらしい。同僚の智絵が、心配そうな顔でこちらを覗き込んでいた。

「どっか調子悪いの？ もう終業時間過ぎてるんだし、急ぎの仕事じゃないなら上がれば」

智絵の言葉につられるように、壁にかけられた時計を見る。白地に黒文字の事務的なアナログ時計は、既に五時半を示していた。

「あ、うん。ありがとう。この一件だけ終わらせて帰るよ」

手元にあった書類を持ち上げてみせると、智絵はわずかに顔をしかめて私にくっと近づいた。

「そんなこと言って、またサービス残業するつもりじゃないの？ 最近やたら残業してるって聞いたわよ。主任は助かるって喜んでるみたいだけどさー、イマドキ残業代なんてマトモに出ないんだから、とっとと帰った方がいいって」

他の人に聞こえないよう注意しながら智絵がささやく。

実際、気持ち程度の残業代しか受け取っていない私は、苦笑いして肩をすくめた。

「そうだね。明日もあるし」

「そうそう」

他の会社はどうか知らないけど、休日も営業まわりのあるウチはシフト制勤務になっている。パートナーや家族のいる人は土日休みを希望することが多いから、私や智絵のような独身フリー組は、ほぼ毎週末出勤していた。

タイムカードを押しに行った智絵を見送り、私もデスクに広げていた書類とファイルを手早く片づけ立ち上がる。

久々に智絵を誘って食事に行こうかな……

まだ残っている同僚に退社することを告げ、彼女の後を追いかけた。

不況とはいえ金曜の夜はこの店も混んでいた。急だったこともあり、行きつけの店に入れなかった私たちは、結局、会社近くの居酒屋に落ち着いた。

智絵がドリンクのメニューをバラバラとめくる。

「とりあえずビール？」

「え、飲むの？」

結果的に居酒屋に来てしまったけれど、明日も仕事だから飲むつもりはなかった。驚く私に、智絵がいたずらっぽくウインクをする。

「一杯だけならいいでしょ。汐里だって、その方が色々話しやすいだろうし」

「え？」

「汐里が急に誘うのは、いつも何か相談がある時だもん」

自覚のなかった行動パターンを指摘された私は、思わず目を見開いた。

「そんなことは……」

「なくもないけど？」

すかさず茶化され、笑いが込み上げる。

「もう、やだなあ」

「観念して話さないよ。それが、ここ最近ぼーっとしてる原因なんですよ？」

鋭い智絵に肩を落とす。

「……うん、多分ね」

正確に言えばちよつと違うけど、きっかけを作ったのは彼だと思う。自分でも理解できないほどあまいいな気持ちを抱えた私は、覚悟を決めて顔を上げた。

お通しと生ビールを前にした智絵は、私の話に凄く意外そうな顔をした。

「お見合い？ パーティとかじゃなくて？」

「うん」

「へー。そういうの今でもあるんだ」

婚活なんて言葉がはやってる昨今でも、あんな昔ながらのお見合いは珍しいと思う。

ダサイブリブリワンピースを着せられ、気まずい緊張を強いられたことを思い出した私は、顔をしかめてうなずいた。

「伯父さんにすすめられて、断れなくてね」

従妹の代理で行ったことは、色々まずいので伏せておく。

「ふーん。で、相手はどんな人？ イケメン？ お金持ち？」

興味津々な智絵は身を乗り出して私を見た。

別荘で守崎さんが言っていたことを、ふと思いつく。見た目と環境のせいでモテ過ぎて困るとかいうバカバカしい自慢。

実際に困っているのかどうか本当のところはわからないけれど、智絵の反応を見る限り、服装さえ直せば確かにモテるんだろう。あの性格だから長続きするかはともかく。

「まあ、それなりかな。でも、顔のつくりがどうかという問題じゃなかった」

実は美形で、かなりのお金持ちだということは、ごまかした。勿体ないとか、どうしても断ったのかとか言われると面倒だから。

「どういふこと？」

「服のセンスと、性格が終わってる」

淡々と告げた理由に、智絵がぶはつと噴き出した。

「なにそれ。どんなのよ？」

彼が見合いに着てきた服と、えらそうで自己中な性格を細かく説明する。ちよつとオーバーに言ったせいも、智絵はビールをこぼしそうになりながら、ゲラゲラ笑う。

「そういうわけで、ありえなかったの」

「ちよつとウケるー。凄くネタっぽい。でも断ったんでしょ？」

「もちろん」

当然だと力強く首を縦に振る。

智絵はいいづちを打ちながら、テーブルに肘をつき、横目で私を見つめた。

「で、断ったのに何を悩んでるの？」

「……」

ふいに核心をつく質問をされ、口ごもる。何も言えなくなった私は思わずうつむいた。

「今更、断ったことを後悔しているのか？」

「それはないよ」

智絵の問いかけに即答する。

もともと私は代理だし、向こうも興味本位でまた会いたと言っただけで、最終的には断るつもりだっただろう。私だって、いきなり手を出してくるヘンタイ男なんて、いくらなんでも願ひ下げ。

大きく息を吸って、吐く。少し前から感じているモヤモヤの正体をつかむために、目

を閉じて気持ちを整理した。

「……多分、相手の人を異性として見たのが、引かかっているんだと思う」

「んー、ごめん。わかんない。どういうこと？」

智絵は難しい顔をして眉間をトントンとつついている。

「私、もう男はこりこりっていうか。前のことがあるから、恋愛とかいらんし」

「あー……」

就職してから知り合った智絵は、私の学生時代を直接は知らない。けれど同期の気安さから、大学生の頃に男関係でひどい目にあつたことは話してあつた。

「元カレと別れてから今まで色々な人と知り合ったけど、友達付き合いするのに相手の性別とか気にしてなかったんだよね。というより、誰も男として見られなかった」

同級生、同僚、取引先。様々な場所で関わる男性を、この四年間、異性として意識したことがなかった。当然、恋愛対象として見ることもなかったから、私の中のそういう感情は前の恋愛の時に枯れてしまったんだと思つてた。

「お見合い相手の人だけは特別ってこと？」

ロマンチックなことを言い出した智絵に、頭を振ってみせた。あの守崎さんに運命を感じるほど、私の好みはおかしくないはず。

「彼がどうこうじゃなくて、お見合いっていう特殊な状況のせいだと思う。嫌でも意識

させられるというか」

本当はそれだけじゃない。あの別荘でのことも大きく影響していた。

もう二度と関わりたくないと思っていた「男性」に触られたのに、身体は快楽を受け入れた。かたくなな心を裏切るように、あっさりと……

いつの間にか残り少なくなっていたジョッキを一気に空けた智絵は、勢いをつけドッツとテーブルに置いた。

「なるほどねー。でもまあ何にせよ、悩むことないんじゃないの。むしろ良いことでしょ。そのダサ男相手に気づいたのは嫌だろうけど。傷が癒えてる証拠だし、汐里も次の恋愛に向かう時期が来たってことよ」

ズキッと胸が痛む。

薄々気づいていた答えをはっきりと指摘されたことで、過去の傷が痛みを増す。

ふっと苦笑いした智絵が、伸ばした指先で私の鼻をつまんだ。

「ひっどい顔。強気の汐里が、らしくないねー」

痛くはないけど、突然のことに驚いてパチパチとまばたきをする。

「なにするのよ」

思いつきり顔を背けて智絵の指から逃れる。振り返りざまに睨むと、弾けるような笑い声を返された。

「もう一杯だけ頼もうか。まだいけるでしょ？」

「……明日に響いても知らないよ」

「へーき、へーき」

それほどアルコールに強くない智絵が、沈みそうになっている私に気を遣ってくれているのだとわかった。

呼び出しボタンを押しまくる彼女を見ながら、私は静かに微笑んだ。

一時間後、すっかりできあがってしまった智絵を抱えるようにして店を出た私は、タクシーを拾うため大通りへ向かっていた。

潰れるほど飲んだわけではないものの、上機嫌すぎる智絵は目を離すとあらぬ方向へ行こうとする。危なくてとても置いてはいけないし、これでは電車にも乗れない。結局、タクシーで家まで送ることにした。

店から二百メートルくらい先の角を曲がったところに、うちの会社が入っているビルがある。そこを過ぎれば大通りは目の前だ。

ケラケラと笑いながら鼻歌をうたう智絵をなだめて、何とか歩かせた。

やっとのことで角を曲がり、会社の入ったビルの明かりを目にした私はほっと息を吐く。もう少しだと伝えるために振り返ると、智絵は目をキラキラさせながらビルの前に

立つ人影を指さした。

「不審者はつけーん！」

「ち、智絵っ！」

ぎよっとして智絵の口をふさぐ。

この距離では確実に聞こえただろう。おそるおそる目線を上げると、うちのビルを覗き込むような姿勢のまま、顔だけをこちらに向けている男がいた。

「あ、汐里さん」

私に気づいた守崎さんは、お見合いの時と同じ緊張感のない笑顔をつくり、手を上げた。

「な、なんでここにいるのよっ!？」

思わず、智絵よりも大きな声で叫ぶ。

人畜無害そうな表情の奥、細められた目だけが不敵な色を映していた。

5

半分眠りかけていた智絵を何とかアパートまで連れ帰り、明日に差し支えないよう世

話をしてから部屋を後にした。

ドアポストへ鍵を落としておいたことを智絵の携帯にメールして振り返ると、アパート前の路肩に停められたメタリックブルーの車が目に入った。この間のデートらしきものの時と同じ、守崎さんの車。

盛大に溜息をついた私は、断頭台に向かうような気分ですら近づいた。

頼んだわけでもないのに私を待っていたらしい守崎さんは、中から助手席のドアを開けてくれた。

車には乗らずに、ドアのすき間から中を覗いて頭を下げる。

「……ありがとうございます」

別荘での一件を考えれば、お礼なんて言いたくない。そもそも会いたくなかったし、口もききたくない。しかし行きがかりとはいえ智絵を送ってくれたのだから、そこだけは感謝しなければならなかった。

「乗って。家まで送るよ」

「いいです。ひとりで帰れますから」

「ここから？ きみの家までかなりあるし、駅までだって遠いよ」

「守崎さんには関係ないです」

名前を呼んだ瞬間、彼があからさまにムツとしたのがわかる。

智絵がいる時はおどおどしたタサ男を演じていたけれど、今はメガネも外して、別荘で本性を見せた時の顔になっていた。

一瞬怯みかけた心を奮い立たせて、睨み返す。相手は前科のあるヘンタイだ。弱みを見せることは絶対にできない。

膠着状態のまま見詰め合っていると、守崎さんはゆっくり口の端を上げ、裏のありそうな笑みを見せた。

「啓也って呼ぶように言わなかった？」

「知りません」

ふいっとそっぽを向く。

前回、下の名を呼べという命令に従ったのは追いつめられていたからだし、そもそも普段からそう呼ぶように言われた覚えもない。

大体もう二度と会わないはずの人が、どうして会社の前にいたのか。

守崎さんはハンドルに寄りかかるように腕を乗せ、さりげなく智絵の部屋を指さした。

「彼女に言っちゃおうかな」

「……何を」

ざくりと身体が強張る。嫌な汗が背筋を伝い落ちた。

「そうだなあ。例えば汐里の弱いところ、イク時の顔、あと、どんな声を出すかとか」

驚いて見つめると、守崎さんは前を向いたまま、ふっと笑った。

私がどんな反応をするか、楽しんでるんだらう。

「別に……」

言われたってどうってことない。好きにすればいい。

そう言いかけた言葉は、守崎さんの声に掻き消された。

「俺みたいな奴と寝たとか思われるの嫌じゃない？」

「あ、あれは守崎さんが無理矢理したんでしょっ。それに最後までしてないし」
私の反論を聞いた彼は、ハンドルに突っ伏し、さもおかしそうに肩をゆらした。

「その言い訳、逆効果。無理矢理なのに感じてイッちゃった、とか説明するの？ あと最後までしてないなんて、証明できないよね」

たたみかけるような意地の悪い言葉に唇を噛む。顔が熱くなるほど腹立たしい。どうにかして一矢報いてやりたかった。

何か思いっきりヘコむことを言っつてやらなくちゃと考えていると、こちらを向いた守崎さんが軽くあごをしゃくった。

「いいかげん車に乗れば。天下の公道で最後までしたとか、しないとか、恥ずかしくない？ 羞恥プレイのつもりなら止めないけど」

「なっ！」

あわてて後ろを振り返る。見える範囲に人はいなかったけれど、アパートの住人の影がカーテンの向こうに映っていた。

もしかして、聞こえてた!?

目の前が真っ暗になった私は、とにかく急いで車に乗り込み、勢いよくドアを引っ張った。

ドアが閉まる派手な音に驚いたのか、守崎さんが首をすくめる。

怒りに任せて、大声を張り上げた。

「アンタなんか、大っ嫌い!」

狭い車内に響く声。

私が怒っていることなど、どうでもいいらしい守崎さんは、ふわっと微笑んだ。

「光栄だね」

こんなに嫌悪を露わにしたのに、余裕の態度。きつとヘンタイは感情の動きもおかしいのだろう。

私の意向も聞かずに動き出した車の中から、外へ目を向ける。暗い窓ガラスに映った女は、ひどく疲れて見えた。

果たしてヘンタイ相手にどれほど効果があるのかわからないけれど、私は、この間み

たいなことはしないと守崎さんに約束させた。

その上で、ドライブがてら少し遠回りしたいという彼の希望を、しぶしぶ受け入れた。というか、受け入れざるを得なかった。動いている車から飛び降りて逃げられるのなんて、スクリーンの中のアクションスターくらいだろう。

この前の山ほどは街から離れていないけれど、郊外の殺風景な道路を車は進んでいく。街灯どころか家の明かりさえ見えない景色のどこが楽しいのか、全くわからなかった。

「こんなことして、楽しい?」

「ん?」

守崎さんが、不思議そうに首をひねる。

「自分を嫌ってる女を強引に連れ出して、真っ暗な道をドライブって、何がしたいの。騙してお見合いた腹いせ?」

一番ありそうな理由を口にする、彼は運転しながら、くくつと笑った。

「俺がきみに惚れちゃって、アプローチしてるとかは考えないの?」

「き……」

反射的に「気持ち悪い」と言いそうになった私は、咳き込むふりをしてごまかした。「女は苦手だって、自分で言ってたでしょ」

「きみだけは特別だって言ったら、どうする?」

まだ言うか、この嘘つき男。

内心で悪態をついて呪むと、まるで心を読んだかのように守崎さんは肩をすくめた。「嘘じゃないよ。特別っていうのは本当。愛より友情を育はぐみたいけどね」

「……友達になりたいと思ってる人間に、あんなことするわけ？」

「一度や二度会っただけの奴にいじられて、気持ちよくなっちゃうのめどうかな」

こめかみのあたりがピクピクする。

これ以上へらず口が叩けないよう、横から鉄拳をお見舞いしてやるうかと思っただけ、守崎さんと心中なんて冗談じゃないので自重した。

「大体、なんでうちの会社の前にいるのよ。守崎さんって自分のところの本社に勤めてるんじゃないの？」

特に調べなくても、守崎という名と、お金持ちっぷりから考えて、どの企業かは想像がつく。守崎エンジニアリングは世界進出もしている日本有数の大企業だ。本社は県庁所在地になっている市の一等地にあるそうだから、ことはだいたいぶ離れている。

「それはもちろん、汐里に会いに来たんだよ」

「はあ!？」

さらっと言われたセリフに鳥肌が立った。

「んー、何かきみと話をするのって癖になるんだよね。はつきりグサグサ言われると逆

に楽しくなるっていうか……俺もしかしてMなのかな?」

いいえ間違いないドSです。

心の中で、すかさずつつこむ。

守崎さんは白い目で見られていることなど完全スルーで、車載ホルダーから外した携帯を放つてよこした。

「それに、きみの携帯番号とアドレス入れておいて。ついでに待ち受け用の写真も」

「なんでよっ」

ぎょつとして目を剥く。

いくらなんでも、こんなドSのヘンタイに個人情報教えるほど愚かじゃない。お断りだと、携帯をまたホルダーに突っ込んだ。

素直に応じない私の態度に、守崎さんはクスクスと笑う。反抗すればするほど、彼を喜ばせているような気がしてげんなりした。

「別に教えてくれなくてもいいけど、毎週きみの会社に押しかけるよ。ああ、家の方がいいかな?」

「やめて!」

いまだに実家住まいだから、家には両親がいる。男性不信で、一生結婚しないと公言している私は、二人にひどく心配をかけていた。

守崎さんを恋人と勘違いされて、ぬか喜びさせるのも、変な男につきまとわれていると不安にさせるのも嫌だ。

溜息とともに肩を落とした私は、戻した携帯をもう一度手に取った。

「笑顔の写真もよろしく」

「それだけは嫌」

「俺のこと、名前で呼んでくれたら譲歩してもいいけど？」

なんでそうなる……

究極の選択を迫られた私は、手早く番号とメールアドレスを入力して守崎さんの携帯を戻した。カメラは起動せずに。

「入力したから」

「写真か名前」

あえて無視したのに、話を戻される。苛立ちからぐつと奥歯を噛んだ。

「ひ、啓也、これでいいでしょ」

「うん。素直な汐里も、可愛いね」

語尾にハートが付きそうな感じでささやかれた言葉に、軽く殺意を覚えた。

6

連絡先を教えてからというもの、電話は最低でも週一、メールは二日に一通届くようになった。

マメというより、嫌がらせに近いものを感じる。最初は無視していたのだけれど、「返事を聞きに汐里の家に行くね」というメールが届いてからは、事務的に返信するようになった。休日の都合を聞いてきたりとか、返事が必要なものだけだけど。たまに混ぜられるどうでもいい世間話と、嘘臭い褒め言葉は綺麗に無視しておいた。

メールアドレスを訊かれた時に指定された呼び名は、あれからもずっと強要されている。はじめはいやいやだったけれど、そのうち私も彼を「啓也」と呼ぶことに慣れてしまった。

運悪く休みが合ってしまった日は、ドライブに誘われる。断ると「会社に押しかける」だの「ご両親に挨拶に行こうかな」だのと脅されるから、結局、言いなりになってしまっていた。

最初の数回は、何をされるかとビクビクしていたけれど、時々ムカつくことを言うく

らいで、普通の友達付き合いとあまり変わらなかった。

今日も今日とて、ほとんど強制的に連れ出されてドライブ中。

私は軽快に車を走らせる啓也の横顔を盗み見た。相変わらず普段はダサ男を演じているそうだけど、こうして出かける時はメガネもなしでイマドキのカジュアルな服を着ていた。

男性に興味がない私でも、素の彼が格好良いことはわかる。性格の悪さを知らないコたちが憧れても、不思議じゃないと思った。

目的地は海辺の水族館。お決まりのデートコース。

どういうつもりでここを選んだのか知らないけど、ラブ度を上げる必要のない私は、啓也を気にせず目一杯楽しむことに決めた。

パンフレットでショーとエサやりの時間、館内の順路を確認する。真剣に見ていたら、チケット売り場から戻った啓也に苦笑いされた。

「そんなに見たいものがあるの?」

「せっかく入るなら全部見たほうがお得でしょ。入館料は変わらないだし」

チケットを買ってきてくれたことへのお礼を一応言って、自分のチケット代を手渡した。

手の中のお金を見た啓也が、呆れ混じりの溜息をつく。

「黙って出してもらえばいいのに。汐里って、そういうとこ可愛くないよね」

「可愛くなくて結構です。割り勘じゃないなら入らない」

きっぱり言いきって見上げると、啓也は肩をすくめてから、入り口に向かって歩き出した。

これはデートじゃない。私たちは恋人同士ではないし、もつと言えば友達ですらない。どれだけ彼の収入が多くても、出してもらう理由はなかった。

ゲートを抜け、ロビーから順路をたどっていく。

海水魚、淡水魚、水生生物……大人になってからはあまり来ていなかったけれど、意外な発見やユニークな展示があって、素直に楽しめた。

途中の枝分かれした通路まで来た私たちは、別館の方から聞こえる歓声に気づいて顔を上げた。ゆっくり見ていたから、ショーが始まってしまったらしい。

「あーどうしよう。イルカショーもう始まってんだ」
「途中からでも見たい?」

啓也の言葉に通路の先を見つめる。派手な水音と、大きな歓声。このショーは大人気で、平日でも満席だとテレビで言っていた。

「今から行っても、離れたところで立ち見だから……」